

---

中に映る空-End of the world and color of the sky-

秋野京

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瞳の中に映る空 - End of the world and  
color of the sky -

### 【Nコード】

N4837W

### 【作者名】

秋野京

### 【あらすじ】

あと一ヶ月で世界が終わる。そんな出来事が現実になってしまった現代。

新興宗教団体が幅を利かせても、お隣の国が荒れに荒れていても、人が生きる様は中々変わらない。

少年の周りに居るのはそこその時を共有してきた仲間たち。もうすぐ世界が終わるのだとしても、彼らの生き方が変わることはな

い。これまでと同じように生きていく。それが終わりに対する唯一無二の術なのだから。

これは特に珍しくもないお話。生きる意味を探す少年と空の色を探す少女の物語。

## プロローグ

見渡す限りの青。そこには一点の曇りもない。いつも、この世界に存在している空が、そこには広がっていた。

人は空がいつ現れたのか知らない。

人は自分がいつこの世界に現れたのか知らない。

人はこの世界がいつ現れたのか知らない。

いつも、当たり前前に存在している物が、いつ現れたのか人は知らない、知らないままに生きていく。それは何も不思議なことではなかった。

だが、そのいつも当たり前前に存在している物が消えたとしたら、人はどんな反応を見せるだろうか。

終わりはすべてのモノに平等に訪れる。過ぎ去った時間がそこには在り、時計の針は常に終わりに向かって進んでいるからだ。時は止まることを知らず、時が経つごとに物は壊れ、生き物の命は散っていく。

この世に永遠はない。永遠のように見えるものが、いくつか転がっているだけ。

そして、終わりに向かっているのはこの世界もまた、例外ではなかった

「世界が終わる……か」

三時限目が終わった放課後、春の陽光が降り注ぐ清明高校の屋上に寝そべった一人の少年、月原宗一は独りごちた。

宗一がそんなことを呟いたのはそれなりの訳があった。

『世界が終わる』

そんなことがテレビ、ラジオ、インターネット。その他諸々のメ

ディアで取り上げられたのが、五日前のこと。

小惑星の衝突による地球の消滅。いつそ笑い飛ばしたくなるほどに荒唐無稽な話だが、端的に言うと、そういうことだった。

「実感、ないよなあ」

実際、宗一のような考えの者も少なくはないのだろう。なにせ、あまりにも突如な宣告だったのだ。『あと一ヶ月で世界が終わる』、そんなことを突然言われて信じる者は多くない。

だが、五日前から今日にかけての様々なメディアによる報道は絶大な効果をもたらした。延々と繰り返されるニュース、映像によるシミュレーション。インターネットでまことしやかに語られる『世界の終わり』の原因。そして止めの国家非常事態宣言。

この世界に住む大部分の人間は否が応にも植えつけられたはずだ、『世界の終わり』がやってくるということ。

そんな『世界の終わり』に対し、国連が打ち出したのは『宇宙移民』と『各国の地下に作られたシェルターへの避難』の二つ。

三ヶ月前に『世界の終わり』を予見していた国連は極秘裏にその計画を進めていたのだ。だが、十分な時間をかけることが叶わなかったその二つは、どちらも万全な備えとは言えなかった。

急ピッチで進められた穴の多い計画というのもあるが、特に大きいのが『定員』の問題だ。宇宙移民にシェルター、どちらも増えすぎた人口を抱える世界にはあまりに小さすぎた。

助かるかも知れない、という人間が限られるとなると、次は『助ける』人間の選定が国連の議題に挙がることとなった。議論は混乱を極めたが、結局地域ごとに人数を決め、そこからコンピューターによる無差別の抽選、という形になった。このような通知がなされたのも五日前のことである。

「何をぶつぶつと言っているんだ、らしくないぞ」

そんな言葉だけ見ると、男としか思えないような口調で屋上の給水タンクの上に座っている少女、一条玲花が声をかけた。

「俺も思春期真っ盛りの高校生だからな、少しナイーブになる時も

ある」

小陰になつてゐる場所から、相変わらず、その青さを湛えている空を見上げながら宗一が言った。

「そんなものか？」

「そんなもんだ」

一陣の風が吹き抜ける。空、という単語で思い出したことを宗一は言つてみることにした。

「そういえば、空の色は見つかったか、一条？」

給水タンクの上を音もなく、器用に立ち上がると空を一瞥し、一条が口を開く。

「見つからないな」

一条玲花は空の色を探していた。何かの比喩ではなく、この世界を覆う空の色を。

人に空の色は何色ですか？ と聞けば、大多数の人は青、と答えるだろう。少しひねくれた者なら赤や黒、あるいは水色と答えるかも知れない。だが、彼女は空の色を明確に答えることができなかった。彼女の瞳には今、青色の空が映っている。しかし、それは本当に空の色なのだろうか？

空が青いには理由がある。まず地球を覆つてゐる空気は、太陽の光を完全に透過するわけではないこと。太陽の光には様々な色が混じつていて、その光が空気中を進む際に、空気中に存在する酸素や窒素、他諸々の分子に当たり、光の一部が乱反射、いわゆる「散乱」を起こす。大部分の光はそのまま地上まで届くが、問題はその散乱された一部の光にあつて、様々な色を含む太陽光の中で最も散乱しやすい光である青色の光、これが青空を作り出す原因とされている。

だが、散乱しやすい光は実を言うと青色だけではない。紫色の光もまた、青色と同じくらい散乱しやすい。

でも、人の目はそれを認識しない、青色しか映さない。そもそも人間以外のものには空の色は何色に映つてゐるのだろうか？ 青色

なのか紫なのか、それとも、もつと別の色なのか。

それ以前に今、自分の観ている空は本当の空なのだろうか？ 頭を埋め尽くす言の葉は増える一方だ。

「そういう月原は、生きる意味は見つかったのか？」

しばしの沈黙の後、一息を吐くと宗一が答える。

「見つからないな」

月原宗一もまた、一つのモノを探していた。

生きる意味。思春期の少年らしい、誰もが一度はぶつかるところ悩みだが、彼は探し続けていた。底知れぬ思考の海の中、己が生を受けた意味を、何のために今を生きているのかを。

晴れ過ぎた空の下、今日も世界の時は休むことなく、その歩みを刻んでいた。

こつという光景も、あと一ヶ月で終わりなのだろうか、人が殆ど居ない放課後の校舎を歩きながら思う。

気味が悪いほどに綺麗で掃除が行き届いた校舎は、陽の明かりに照らされると、磨き上げられた廊下がそこかしこに光を反射し、校舎ではない何か別な物の様にも見える。

「静かだな」

「そうだな」

隣を歩く一条の言葉に相づちを打つ。『世界の終わり』が宣言されてから、部活動などに取り組む者は少なくなった。一部の運動部は相も変わらず活動を続けているが、文化部は吹奏楽部と我が部以外は全滅の状態だ。

あと一ヶ月という短い期間を部活動などに費やしたくはない、という考えの者が多いのだろう。実際、俺もそう思っていたが、特にやることもないので部活には顔をだしている。

実を言うと、その部活の部長は俺であり、部活に顔を出す部員が居る以上、部長としての責任を持って出席せざるを得ない、ということもあった。まあ、『部活』なんて呼べる代物なのかはともかく、「そういえば、最近流行っている新興宗教の勧誘が家に来た」

一条が明日の天気のことでも話すかのような調子で言った。

その黒く長い髪とキツめの印象を与える釣り目、女の子にしては低い声と変わった口調。ぱっと見、話しかけにくく、冷たい印象を与えている一条だが、実際話してみるとそうでもない。他の女の子のように冗談を言ったり、拗ねたり、笑ったり、怒ったりする。見た目で人を判断してはいけない、という言葉の正しさが一条をみるとよく分かる。

「天使の囁き、だっけか？ 一条の所にも来たのか」

「そう、それ。ということとは月原の家にも来たのか」

天使の囁き。三年ほど前から勢力を伸ばし始めた新興宗教だ。何でも神の御使い、天使を名乗っている教祖が、今から二年前に世界の終わりが西暦二十十三年五月六日に訪れると予言し、それが今回政府から発表された『世界の終わり』とまったく同じ日付だったという事で注目を集め、さらに教祖自らが『世界の終わり』を乗り越える方法がある、などと宣言し、信者を急激に増やしているらしい。

正直、俺には眉唾ものとしか思えないが。

「ああ。尤も俺が不在の時に、母さんが対応したみたいだけどな、結構しつこかったらしい。一条の方は大丈夫だったか？」

「無論だ。勧誘に来た人は若い女の人だったな、女の私の目から見ても美人だった。そんな人がいかに教祖は素晴らしい方か、とか世界の終わりを乗り越える方法がある、とか熱心に語る訳だ。あんまりしつこいから、私は食べようと手に持っていたチューペットをそのよく動く口に突っ込んでやった。そして動かす、わりと激しく。彼女は驚きを顔に張り付け、少し顔を赤くしてチューペットを啜っていた。それを見て私は言っちゃったのさ『あら、フェラがお上手ですね、彼の物もこんな風に啜っているの？』と。彼女は顔を真っ赤にして逃げて行ったよ」

まるで、どこぞの欧米人が自慢の武勇伝を披露した後のように、一条がニヤリと口を歪める。

色々大丈夫だろうか、この子。

「女の子がそんなことをしちゃいけません」

「まあ、チューペットの下りは嘘なんだけどな」

「嘘なのか」

「嘘なのだ」

などと話しながら、しばらく歩き、部室の前にたどり着いた。この二年と少しの間、何度も叩いた扉をノックする。

「開いてるよー」

聴き慣れた女の子の明るい声が返ってくるのを聴き、扉を開けた。向かって右にはそこそこに使い古されたソファーに、デスクトップパソコンが置かれた机。左には小説や学術書などがきっちり配置された本棚、それに部屋のと真ん中に置かれた大きな机。そして極めつけは中央奥に置かれたホワイトボード。およそ部室というものにあるまじき物が揃った、いつもの部室が目に入る。

「いやあ、部長が遅刻とは関心しませんなあ」

いたずらっぽい笑みを浮かべ、ソファーに座り、すっかりくつろいだ様子（ひんがし）の広原莉子が出迎える。我が部の部員の一人だ。

「すまん、ちよつと屋上で黄昏てたら時間が過ぎてた」

「右に同じく」

一条が俺の言に同調する。

最近はどうもいけない。呆けていると考えなくて良い事まで考えてしまう。

「とかなんとか言っちゃって、人気のない屋上で……二人静かに……けれども熱く、激しく！ 獣のように愛を交わしてたんじゃないの？」

どこぞの演劇部ばりのオーバーリアクションで莉子が力強く話す。ぶつちやけ、ちよつとウザい。

「俺と一条はそういう関係じゃない、ついでに俺のようなイケメン紳士が、野外プレイなんてするはずない」

「何度も言うが、自分で自分をイケメンというのは如何なものか」  
まるでゴミ袋の中に入った魚の骨を見るような目で一条が俺を視る。

この視線も慣れてくると悪くない……何を言ってるんだ、俺は。事実だから仕方ない」

「容姿が良いのは否定しないけど、やっぱり自信に満ちた顔で堂々と言われるとなんかなあ……月原ってやっぱり残念な子？」

「なんで俺が残念なんだよ、こんなにカッコイイじゃん」

そして、俺は得意のイケメンポーズをとって見せる。ちなみに見

た女は死ぬ（悩殺的な意味で）。

「うわあ」

如何にも可哀想な子を見る目で、一条と莉子が見つめてくる。

このカツコ良さが分からないとは、最近の女子はなっていない。

いや、彼女たちが駄目なのではなく、俺が産まれてくるのが、早すぎたのかも知れない。特別な人というものはいつだって遅れて評価されるものだ。しかも俺は特別な人しか舐めることが出来ない飴を舐めたこともある、身体の半分どころか百パーセントが特別で構成された、どこからどうみても特別な存在だ。余りに特別すぎてまだ時代が俺に追い付いていないのだろう。

いや、しかし、よく考えれば、俺は特別でありながら完璧なイケメンだ。完璧ならば、時代など望まなくても付いて来るものではないだろうか？ 結論、俺が駄目なのではなく、彼女たちが駄目なのである。決定、大決定。

「俺は宗一のそういう所、嫌いじゃないけどな。如何にも自信がないですって、卑屈にしてる奴よりずっと良い」

痛い子なのは否定出来ないけどな、と付け足し、パソコンを弄っていたもう一人の部員、和泉遼一いずみりょういちが苦笑する。

ちなみに俺は痛い子ではない。

「和泉がそうやって甘やかすから、月原が増長するんだよ」

そう言っただけ頬を膨らませる莉子を遼一が宥める。この部では見慣れた光景だ。

「で、遼一は今、何やってたんだ？」

「いつもの裏掲示板チェック。人のむき出しの悪意ってのは何度見てもうんざりするな」

顔をしかめて、パソコンの画面を指差す。そこにはスレッドタイプの掲示板に書き込まれた、実名も交えた罵詈雑言の数々が映しだされている。

見ている、あまり気分が良いものじゃない……が、これも我が部の活動の一つなので、投げ出すことは出来ない。

「あと一ヶ月で世界が終わるつてのに、今日も仲良く悪口祭りか……呑気なもんだ」

死ね、ウザい、殺す、キモい、生きてる価値がない、消えろ……などなど。ありきたりで酷く汚い言葉が、電子の海に浮かんでいる。

「世界の終わり……ねえ。実際、みんなはそれを信じてるのか？」

遼一が愛用している銀縁メガネの位置を中指で直す。本人曰く、ズレていなくても無意識でやってしまっらしい。

「信じてるのか、と聞かれると微妙だけど、一応国家非常事態宣言も目出度く出たことだし、可能性としては高いんじゃないか？ 六十パーセント以上はありそうだ」

「私も月原と同じ意見かな。少なくとも可能性は低くないと思う」

「わたしも二人に同意。国家非常事態宣言出すんだから、危機的状況ではあるでしょ、今の世の中の様子からは想像できないけど」

世の中とは言っても世界的に見れば、今は結構混乱しているが、日本やヴァチカンなどの一部の国は比較的平穏であるらしい。電車やバスなども本数こそ減ったが、一部の仕事熱心、または責任感の強い方々が、動かしているし、それを利用する人も居る。一部のヤケになった阿呆どもが、犯罪を起こすかと思えばそれも無い。

要するにいつもと大して変わらないのだ。それが世界の終わりなど信じられない、という気持ちから来る物なのか、それとも諦めによる物なのか、俺には分からない。なんにしても、この国は今のところ平和だ。

「遼一はどうなんだ？」

「俺も基本的にはみんなと同意見……でもさ、信じられるか？ あと一ヶ月で世界が終わるなんてこと。俺は信じられない。言葉にすると安っぽくなるけど、家族と過ごして、気の合う仲間とワイワイやって、自分のやりたいことを全力でやる。そんな当たり前があと一ヶ月で終わるなんて信じられないし、信じたくもない」

終わる…… 今までそこに在るのが当たり前だと思っていたモノが失くなる。そんなことが本当に起こるのだろうか。

「やめよう、こんな話。終わるかどうか、確実な事は誰も分からないんだから、ね？」

暗くなりかけた場を持ち直すように、莉子が明るく声を出す。

「そうだな、悪かった。今のはナシだ」

不意に無機質な電子音が鳴り響く。その音を聴いた途端に、その場に居た全員が、示し合わせたように口元を歪めた。

「それじゃ、一仕事と行きますか」

走る。人気のない廊下をできるだけ足音を立てないように三人でただ、ひたすらに。教職員はこの時間には二階の職員室でちょうど会議なので鉢合わせすることもない。だから、走る。

「いやあ、久々だね、こつちの仕事は。テンション上がっちゃうよ」走りながら、莉子が顔を綻ばせる。幸いなことに一条も莉子も運動神経は抜群に良い。特に莉子はそんじょそこの男子にも負けなほどの体力の持ち主だ。

「莉子、それは少し不謹慎じゃないか？ 少なくとも笑い事じゃない」

咎めるような口調で一条が言ったが、その割には一条の顔も少し、綻んでいるように見える。

まったく、うちの女子ときたら、お転婆な方が多い。

「そんなこと言っちゃって、玲花もワクワクしてるんじゃないの？」

顔、笑ってるよ？」

「そ、そんなことはない！」

ブンブンと首を振りながら一条が否定する。

こつというところは少し可愛いんだよな、普段の冷めた感じとギャップがあつて。などと、階段を一段飛ばしで降りながら思う。

うん、我が部の女子（といっても二人だけだが）は皆可愛くて、大変よろしい。

「よし、そろそろ速度を緩めよう。足音立てるなよ、私語も厳禁」  
目的地である理科室に近づいてきた所で、指示を出す。俺の指示に了承の意をみんなが頷きで示した。

そろりそろりと扉に近づいていく、逃げられては居ない。ここまで来ればもう良いだろう。懐から馴れ親しんだピッキングツールを取り出す。学校の理科準備室程度じゃ五秒もあれば、すぐに開錠出来る。

俺は開錠した扉に手を掛けると勢い良く開け放った。

「はいはいはい、清明高校治安部、清明高校治安部、皆様の有意義な学生生活をおはようからおやすみまでしつかりと見守り、指導する、清明高校治安部ですよー」

治安部。そのなんとも仰々しい名前の部活こそが、俺たちが所属している部活だった。

毎年、学年末に行われる、二年生の成績上位者五十名を対象に行われる、様々な形式のテストで最も優秀な得点を出した、四名から五名が、この治安部に入部することになっている。

主な活動内容はその名が示すように学校の治安を守ること。今のような一般生徒からのタレコミ、または独自に調べ上げた（これに関しては治安部が製作した学校裏掲示板が意外にも役立つている）いじめやそれに類することの取締り。他には教員が行う服装や頭髪の指導の補佐、生徒会の仕事の手伝いなどもある。

部活というよりは学校直属の組織、委員会と言ったほうが良いかもしれない。学校設立当初から続いているこの治安部だが、入部は別に強制ではない。

では何故、こんな面倒な部活の入部を断る者がいないのかというと、国内でも有数の進学校である、清明高校の治安部という肩書きが、恐ろしく意味を持つからだ。

曰く、内申書にその旨が記入されていたというだけで、有名大学に試験なしで無条件に入学した、などということもあるらしい。

そこまではいかないまでも入試などで大幅なプラスとなるのは確

実。もちろん進学だけではなく、就職にもそこそのプラス補正を与える。なんとも浮世絵離れした話だが、事実なのだから恐ろしい。そういうメリットがあるからこそ、この部活への入部を断る者が居ないのだ。

「さてと」

理科室に入ると、白を基調とした小奇麗な空間に、流し台が備え付けられた六つの実験台、部屋の奥に備え付けられた黒板と教壇が目に入る。

その教壇の傍で何かを囲むようにして、輪を作っていた五人の生徒が一斉に振り返る……ふむ、五人とも女子か。受け取った情報ではあと三人の男子が居るはずだが、近くに居ると考えたほうが良いな。三人の方は別行動のため、裏口に回っている遼一が当たった可能性もある。

一人の女子が俺たちの姿を一睨みすると、一つ息を吐く。

「なんで狗がこんな所に居るんだよ、鍵、掛けてたはずだろ」

言いながら、教壇を蹴飛ばす。

あーあ、スマートじゃないな。女の子、それも見た目は清楚そうな感じなのに。

「そんなことはどうでも良い、お前たちには今から生徒指導室に行ってもらう」

一条が凜とした声でその場を制する。

「ちよつとちよつと、一条さん、いきなりそれはないんじゃない？」

私たちが一体何したっていうの？」

もう一人の女子が不服そうに申し出る。

「この期に及んで惚けないですよ。あんたたちが囲んでるその子、いじめられてるってタレコミがあったのよ」

莉子がやれやれと言った風に告げる。

いじめ。有数の進学校である清明高校のような場所でも、そういうものはある。いや、名うての進学校であるが故に日々の勉強などで澱のように溜まったストレスが、今のような残念な形で爆発して

しまつのかもしれない。

「いじめ？ いやいや、そんなことしてないって、この子に聞けば分かるよ、今もちよっと勉強の息抜きに遊んでただけだから……ね、そうでしょ小林？」

小林と呼ばれた女子が、うつむいたまま小動物のように身体を震わせた。

なんというか、如何にもいじめに遭いそうな感じの子だ。

「下手な言い訳は要らないから、さっさとお縄に付いてくれ。大丈夫、生徒指導室ってそんなに怖くないから」

俺は後光が差しそうなほど爽やかな笑みを浮かべ、目の前の哀れな子羊たちに歩み寄る。

「ふざけんな」

一人の女子がそう叫ぶと、後ろに置いてあつた、清掃用具が入れられたロッカーから二つの人影が飛び出る。

やっぱり居たか……というより、よくそんな狭い場所に男二人も入れたもんだな。

「お前らが来るかも知れないってのは予想してたんだよ」

女が喚く。ああ、うるさい。うるさい女は嫌いだ。

「おらっ」

背の高い男から大振りな拳が飛んでくる。全然、腰の入っていない駄目なパンチだ。避けるのは難しくなかった。少しだけ横にずれ、躲す。

「はい、お返し」

軽く足払いを掛けてやる。下半身にはまるで注意を向けていなかったのか、あっさりと男はバランスを崩した。

「くそ野郎が」

真面目そうな外見に似合わない、三下臭漂うセリフとともに、もう一人の男が拳を突き出してくる。足払いを掛けてすぐに横から飛んできたので、今度は避けない。素直に手で受け止めてやる。

「もうちよい鍛えとけよ、ある程度の筋肉はモテる男の必須条件だ

ぜ？」

拳を受け止めたまま、腹に一発、拳をプレゼントする。

「うっ」

よろめいた所をそのまま腕を掴んで引き寄せ、突き飛ばす。突き飛ばされた男は起き上がりかけた方にぶつかり、二人仲良く倒れた。

「ストライーク」

呆気無いものだった。あの女の様子からして、それなりの準備はしているものかと思っただが、そんなことはなかった。また、暴れられると面倒なので、倒れた二人の首筋に素早く手刀を入れる。それで、終わりだった。

「くそっ、離せ」

「だーめ、あんたたちには大人しく生徒指導室に行ってもらうんだから」

二人の女子が、何とか逃げようと暴れているようだったが、莉子と一条に綺麗に押さえ付けられ、抵抗らしい抵抗は出来ていないようだった。残りの三人は既に諦めたのか、抵抗が無駄なことを悟ったのか、はたまた、いじめにはあまり乗り気ではなかったのかは分からないが、抵抗せずに大人しくしていた。一人はじつと俺の方に視線を注いでいる。

「面倒だから全員気絶させとくか」

言って、さつきと同じ要領で手刀を入れると、すぐに全員気絶した。人に手刀を入れるだけの簡単なお仕事だ。報酬も、もちろんある。

「ほう、これは中々だな」

俺は気絶した内の一人のスカートをおもむろに捲り、中のブツを鑑賞していた。

教壇を蹴飛ばすようなこととして水玉模様とは……素晴らしい。やはりギャップといものは大事だな。

「なに、ナチュラルに変態行為してんのよ、殺すよ？」

莉子が凄まじい形相で睨みつけてくる。

「そこにスカートがあるなら、堂々と捲る。そういうものに俺はなりたいんだ」

「水臭いなあ、月原。そんなに死にたかったなら、そう言ってくれば良かったのに」

莉子さんがばきばき手を鳴らしてとても怖いので、俺は泣く泣くブツの鑑賞を止めた。

「なんだ、そんなにぱんつが見たかったのか、それなら私が見せてやろうか？」

正に天からの贈り物。思わぬ言葉が一条さまから降ってくる。

「マジで？」

「マジだ。ほれ」

そうして、一条さまがおもむろにスカートを捲り上げました。

白。天使の翼と同じ色の、眩いほどに私の目に焼きつくそれは、どこか神々しくさえあったのです。

「素晴らしい」

思わず、呟いてしまいました。今、私は世の中に埋もれた神秘の一つを垣間見ているのかも知れません。

「ちよっ 玲花、な、なにやってんの」

気が動転した様子の莉子が一糸のスカートを元に戻す。

気が利かないやつだ。

「なにっつてぱんつ見せたただけだが。ただの白い布切れだ、その中の物が見えない限り問題ないだろう」

「大有りだよ！」

なに慌ててんだこいつ、と言った表情の一条だが、莉子は顔を赤らめ慌てている。前から性的なことについて臆するところを見せなかった一条だが、さすがに今は予想していなかった。

「てか月原、あんた普段はパンモロは駄目だ、とかチラリズムこそ至高、とか言ってたくせに、なに玲花に頼んでんのよ」

「すまないな、莉子。チラリズムが至高なのは確かだが、目の前にエサがぶら下がっていたら、全力でエサに喰いついてしまうのが、

男の性なんだ」

莉子が呆れた様子で俺を見る。一条はその様子をみて面白そうに口元を歪ませていた。

「お楽しみ中のところ悪いが、こつちも終わったぞ」

いつの間にか裏口からやって来た遼一が、一人の男子を引きずりながら言った。

「お疲れ、これで全員捕まえたってことで良いかな？」

「それで問題ないだろう」

俺の確認に遼一を初め、みんなが答える。

「おい、大丈夫か？」

蹲ったまま、ぶるぶると震えている小林さんに声を掛ける。

「え……？」

何回か声を掛けると、恐る恐るといった感じで、ようやくこちらを向いた。その情けない姿に少しの苛立ちを感じながらも手を差し伸べる。

「立てるか？」

「は、はい」

遠慮がちに俺の手を取り、立ち上がるときよろきよると回りを見回す。

本当に小動物みたいだ。

「あの……これは？」

気絶したいじめっ子たちを見て、不安そうに言った。

「治安部は知ってるだろ？ お前が虐められているって教えてくれたやつが居て、それで俺たちがここに来た訳だ」

「そうですか……ありがとうございます」

まだ、どこか不安そうに小林さんが言った。

「まだ、何か不安なことがあるのか？ 差し支えなかったら言ってくれ、そうすれば、できるだけ解決できるようにするからさ」

募る苛立ちを隠すように、できるだけ優しい表情と声音を作り、

言った。

小林さんが少し躊躇うようにもじもじとした様子を見せる。

「俺、小林さんの力になりたいんだ。無理にとは言わないけど、できるなら言って欲しい」

いかにもな優しく真摯な表情で、小林さんの目をまっすぐに見つめて言った。

俺たちとは言わずに俺と言うのがポイントだ。

すると、すこし顔を赤らめ、躊躇いながらも、小林さんがその小さい口を開いた。

「その……失礼で自分勝手なのは分かってるんですけど、この人たちをこんな風にしちゃったせいで、余計に酷いことをされるんじゃないかと」

なるほど。こいつらが報復に来ることを恐れたわけか。小林さんの立場ならそう考えるのも無理はないのかもしれないが、どこか気に入らなかつた。

「ああ、それなら大丈夫。こいつらは全員、生徒指導室に連れて行くから、もう二度と小林さんには手を出さないと思うよ」

実際に行ったことも、確かめたこともないが、生徒指導室へと連れて行かれた人間は二度と悪さをする気がなくなるそうだ。

ふざけた話だが、実際、連れて行かれた人間は何かに怯えるようにして、悪いことをびたりと止めてしまいう光景を何度か見たことがある。少なくとも、この学校に在籍している間は大丈夫とって問題ないだろう。

「本当……ですか？」

こちらを見つめるその瞳には、疑いの色がありありと浮かんでいる。

まあ、これは無理もないことだろう。

「大丈夫、約束する。だから、信じてくれないかな？」

そう言って、にこりと笑いかける。

俺の今までの経験から、女の子は理屈で丸め込むよりも、こつこ

った手で言ったほうが納得……というよりは受け入れてくれる場合が多いのは分かっている。

しかし、解せないのは俺と小林さんの様子を見守っている三人だ。一条は口元を歪めているし、遼一も可笑しくて仕方がない、という笑みを隠そうともししていない。莉子は特に酷く、声が出ていないのが不思議なくらいに顔を崩壊させている。

こんなにカツコイイ俺を観られるのだから、笑いではなく、涙の一つくらいは流して欲しいものだ。

「そうですね……じゃあ、納得はできないけど、月原くんのこと、信じます」

そう言っつて、ありがとうございました、と小林さんが俺たち治安部の面々に頭を下げた。

どうやら信じてくれたようだ。

「じゃあ、話もまとまったところで私と玲花は小林さんを送って先生に報告してくるけど見張り、お願いできる？」

莉子が今後の動向を切り出す。先生たちが、この愚か者どもを引き取りに来るまでの見張りだ。さすがに四人だけでこの人数を運ぶのは難しい。

「女の子だけだと、危ないから俺も行くよ」

遼一が三人の付き添いを買って出る。

「心配性だね、和泉は」

苦笑しながら、けれどもどこか嬉しそうに莉子が言った。

実のところ、以前に一回だけ今回のように報告しに行った二人が襲われ、あわやということもあつたので、護衛を付けるのは大袈裟ではない。事が起こってからではなにもかも遅い。

「じゃあ、俺が見張りしとくから、そっちの方は頼んだ」

返事を聞くと、四人は今回の件の報告のと小林さんを送り届けるため、その場を後にした。

「久しぶり、宗一」

それから少しの間を置いた後、背後から声を掛けられた。

「陽原か。計ったようなタイミングで来ることが多いな、お前は」  
振り返ると黒く艶のある、セミロングの髪を弄っている幼馴染の姿がそこにあつた。大抵の人なら姿が見えなくてもその気配で、なんとなくそこに居るのが分かるのだが、陽原だけは不気味なまでにそれが無い。今、目の前に居るのに、瞬きをすればそこから消えてしまつのではないか、という希薄さがある。

「そんなそっけない呼び方じゃなくて、前みたいに玲奈って呼んでよ」

そう言い、ぴたりとくっついて来る。女の子独特のいい香りが鼻をくすぐる。

我が幼馴染ながら、はっとする程の美人だった。雰囲気は一条に似ているが、それは一条のように澄んだ綺麗なものではない。どこか妖しげなものがある。

「やっぱり昔みたいじゃないと駄目？」

俺の胸に顔を埋めてくる。そうしていること自体に何か危ういものを感じさせる。落ち着かなかつた。

陽原が言うように昔に比べて余りにも変わってしまったのが、この違和感の原因なのだろう。昔のこいつはこんな妖しげな雰囲気を漂わせてはいなかつた。莉子のように見ていると思わず元気になるような、そんな明るいやつだった。今の陽原にその面影はない。

「あの時から三年しか経ってないのに、変わりすぎだからな、お前。誰だって戸惑う」

「三年もあれば人は変わるよ、宗一。それより、そろそろ私と付き合ってくれないの？」

「無理だ」

「何故？」

「その気がないからだ」

「別に良いんだよ、他の女子とも付き合いたいなら掛け持ちしても最後に私だけを見てくれれば、それで良い」

少し、瞳をうるわせ、上目遣いでこちらの様子を伺って来る。その様子に心を動かされるものはある、可愛いとも思う。だが、小賢しかった。

こういつのを見ていると、不安になる。こいつは本当に俺の知っている陽原玲奈ひなななのかと。実際、こいつが玲奈だという認識は俺の中では薄い。

だが、この陽原が語ってくる思い出は、当時の俺たちにしか分からないはずのものが幾つもあった。そして、ごく稀に、ほんの僅かだが、昔の玲奈の雰囲気を感じることもある。

「やっぱり、あの女？」

「あの女？」

「一条玲花」

「あいつはそういうのじゃない」

「嘘、宗一はあの女のこと、よく観てるから」

「なんで、断言できるんだ？」

「宗一のことを観てるから、いつも」

肌に粟が立った。陽原の目はこちらがはっとするほどの光を放っている。

「なんてね、嘘よ。ただ、宗一って昔からああいうタイプの子が好みでしょ」

少し、口を歪め、陽原がブラウスのボタンに手を掛ける。

「よせ」

「私なら、今まで宗一が付き合ってきた子より、気持ちよくしてあげるよ？」

露わになった、豊かな胸を覆う扇情的な下着を見せつけ、誘うような口調で耳元に囁く。

三年の月日を経て再会してからというものの、陽原はよく体をくっ付けたりするようになった。それも手などではなく胸やその他、性的な興奮を煽るような場所だ。これも昔では間違ってもやらなかったことだ。そして、今日は些か度が過ぎている。

「やめる、こんなことお前らしくない」

陽原を突き放し、言った。幼馴染のこんな姿を見るのはもうたくさんだった。

「私……らしい？ ふふ、宗一が今の私に私らしさを語るの？ あはは、可笑的い」

そう言つて陽原が笑い始める。酷く、乾いた笑いだった。

身体が揺れる。次の瞬間には押し倒されていた。避けられないものじゃない、受け止めることもできた。ただ、その気になれなかった。「ねえ、分かつてるの宗一。もう時間がないんだよ？ 後、たったの一ヶ月で世界が終わつちゃうんだよ？」

俺を見下ろし、真つ直ぐな目で陽原が語りかけてくる。しかし、その瞳はどこか濁っている。

「決まつたわけじゃないだろ」

「決まつてるの。世界はあと一ヶ月で滅ぶの、確実に」

ぐぐつと顔を近づけてくる。お互いの吐息が直にかかる距離だ。

「だから、私と付き合つて、私だけを観て」

「言つてることが意味不明だぞ、お前。世界の終わりと俺がお前と付き合うことに何の関係があるんだ？」

「終わっちゃうんだよ、あと一ヶ月で何もかも。終わる前に好きな人と結ばれたいと思うのは可笑的い？」

不意に陽原の瞳の中にあつた濁りが消えた。とても、綺麗な、けれどもどこか悲しげな瞳が俺を映す。

やや遠くから莉子のものと思われる愉快な叫び声が聴こえて来た。

三人が戻ってきたのだろう。

「いけない、もう時間だね。あの子たちが帰ってくる」

忘れ物を思い出したかのように、そそくさとはだけた服を元に戻すと、陽原が言った。

「じゃあね、宗一。また、今度」

そう言つと陽原は音もなく裏口から消えた。

裏口からわずかに流れ込んで来た、弱々しく柔らかい風が頬を撫

でる。

「嘘、宗一はあの女のこと、よく観てるから」

さっきの陽原の言葉が頭を掠めた。

「よく観てる……か」

理科室の窓からは相変わらずの青空が見える。その空を二つの翼を車輪のように回転させた鋼鉄の鳥が、雲を描きながら飛びぬけていく。

青しかなかった空に白が生まれていた。

「君の瞳に映る空はどんな色をしている？」

空を見たからだろうか。ふと、そんな言葉を思い出す。それは彼女との初めての出会い。

あの時、俺はなんと答えたのだろうか。そんなことを思いながら、しばらく、窓越しに空を見つめていた。

第一話「What color is the color of the

更新速度はかなり遅めです。

第二話「今日は、みなさんにちょっと、戦争をしてもらいまーす」

武道場を包む空気が熱を帯びていた。目の前に立っている男以外は何も目に入らない。

もう、どれだけの間、向かい合っていたのだろう。ただ、ひたすら目の前の圧力に抗っていた。

顎の先から汗が滴る。

俺も目の前の男も、まるで人の形を象った石像にでもなってしまうたかのように、微動だにしない。だが、石像ではないことは周りを包む熱とその存在が放つ気で分かる。

不意に、目の前の男にほんのわずかな隙ができた気がした。男を倒すべく、踏み込む。

縮地。相手との間合いを瞬時につめる技術。正確には相手に動いていることを悟らせず、間合いをつめる技術だが、俺はそれを拙いながらも習得していた。男との間合いが詰められ、その体を捉えた。そう、思った。

体が浮き上がる。何故かは分からないが、俺の足は地に着いていなかった。

気づくと、世界が反転していた。いつの間にか背中では力強くも優しい感触の畳みに支えられ、視線の先には武道場の天井が見える。それでようやく打ち倒されたのだ、ということが分かった。

「ここまでだな」

頭上から声を掛けられた。

「あい」

返事をし、立ち上がろうとしたが、体に力が入らず、間の抜けた声だけが出た。

「そのままでもいい。しかし、フェイクに引っかかるとはお前らしくないな、宗一。それに今日のお前はここに来た時から、いつも以上にどこか浮き足立っていた」

このままでは格好がつかない。無理やりに体を引き起こし、正座で先生に向き直り、さっきのような間の抜けた声にならないよう、腹に力を入れる。

「本当ですか？」

「ああ」

実際、そうなのだろう。特に五日前、『世界の終わり』がメデイアで取り上げられた辺りから、どこか心が揺れていた。

世界の終わりを信じていなくても、心にはどこかそれに怯えている部分がある。気にはしていないと振舞っていても、気づくとそれについて考えている自分が居た。

心底、臆病な奴だった。

「というより、お……先生、俺っていつも浮き足立っているんですか？」

思わず、伯父さん、と呼びそつになり、慌てて訂正する。

俺の武術の先生である、ひろながまさみち広永正道は俺の母方の兄だ。元々は一つの道場を持つ、師範だったが、今では後進にその地位を渡し、その身を引いているが、五十を超えた年齢でもその実力は他者を寄せ付けない。教えてもらっているのは関口新心流、いわゆる古武術の流れを組む武術だが、伯父さんの流派である広永派は先祖の時から好き勝手に型を改良したり、独自の技術を取り入れてきた流派なので純粋な関口流とは言い難い。

そんな先生の最後の弟子である俺は先生個人が所有している、このやや小ぶりの道場を使って稽古をつけてもらっている。ただ、稽古の時以外は普通の親戚として接しているため、稀にその時の呼び方で呼びそつになってしまう。

「なんだ、自覚なしか。お前はいつも浮き足立っているよ。というより地に足が着いていない」

「そんなにですか」

「さっきのようにお前と向き合っていると、いつも感じるんだが、なんといいのかな」

先生が顎に手を添える。なにか考え事をする時の癖だ。

「自分の行くべき場所が分かっていない、迷子のように見える」  
「うっ」

ぐさりと先生の言葉が胸に刺さる。

「凶星か。なんにしても自分の方向性。それを見つければ、お前は今以上に強くなれる。元々、才能はあるんだ。俺はこれでもお前を買っている」

「はい、ありがとうございます」

自分を買っている。尊敬する人が向けてくれる、その一言がとても嬉しく感じられる。

「まさか、あの時の口だけが立派な小僧に、こんなセリフを向けることになるとは思わなかったが」

そう言っ先生が苦笑する。

今、思えば、俺がこの人に教えを乞うようになった理由はあまり褒められた物ではないだろう。一言で言うならば、『喧嘩で負けないうようになりたかった』これに尽きる。

当時、小学生だった俺は、何かを虐めているものが最高に気に入らなかった。大した理由もなく何かを足蹴にする者、足蹴にされても抵抗しようとすらない者、それぞれが居て、そのどちらも気に入らなかった。

だから、ある日の放課後、クラスメイトの一人が三人がかりで虐められているのを見かねて、それに割って入った。正義感からではない、俺が気に入らなかったからだ。

だが、結果は無残にも返り討ち。為す術なく袋叩きにされた。当然だ、元々、腕っ節が強いわけでもない。そんな俺が同年代の男三人も相手に勝てるはずがなかった。その後、教室でぼる雑巾のようになつて倒れていた俺を、見回りに来た先生が保健室に連れて行き、親に連絡してくれたことだけは覚えている。

悔しかった。その後の俺に訪れた感情はただ、それだけ。自分が嫌悪するものに負けた悔しさ。それは幼い俺にとって初めて経験し

た身を焦がすような感情だった。

強くなりたい。そう、思った。思うだけではそれが叶わないことも知っていた。だから、当時、まだ道場の師範を務めていた伯父に教えを請うようになったのは必然だったのかもしれない。

最初は断られた。『そんなくだらない理由で教えを請うとは何事か』、幼い俺の願いはその一喝の下に切り伏せられた。

でも、それぐらいでは諦めなかった。断られたその後は、まるでゴミに群がるコバエのように伯父に纏わりついた。今、思うと相当ウザかったと思う。学校から帰るとひたすら伯父に頼み込む。土下座も躊躇しなかった。相手にされない時は稽古の見学をして、一人でもできそうな内容のものは家で筋力トレーニングと一緒に見よう見まねで実践した。それが一ヶ月ばかり続くと、空いた時間に伯父が稽古をつけてくれるようになった。その機会と時間が少しずつ増え、伯父は俺の先生となり、今に至る。

「では、今日はここまでにするとしよう」

「はい、ありがとうございます」

立ち上がり礼をすると、腹の底から感謝の言葉を出すと俺は素早く帰り支度を済ませていく。

「なんだ、今日はやけに急いでいるんだな」

「はい、これから少し、用事があるので」

言って外していた腕時計で時間を確認する。時計はちょうど十時を回ろうとしているところだった。

「また、女遊びか？ 程々にしておけよ」

苦笑しながら先生が言った。

「違いますよ、遼一に莉子、一条。先生も会ったことあるでしょ？

あいつらとの付き合いですよ」

「ああ、あの子たちが。なるほど、道理でいつもより楽しそうにしてる訳だ」

「俺がですか？」

「お前以外誰が居るんだ。さあ、友達を待たせるのは悪いから早く

行つて来い」

そんな先生に送り出され、俺の何気ない休日は幕を開けたのだつた。

追い詰められていた。今の状況を表すのにこれほど適切な言葉はないだろう。手持ちの駒の大半を取られ、ただ、チェックメイトを待つばかりの哀れなプレイヤー。周りにはそう思われているかもしれない。

だが、ここまでは俺の狙い通りに進んでいるのだ。追い詰められているわけでも、ただ、座してチェックメイトを待っているわけでもないのだ。

でも、本当にそうなのか？ 自分の狙い通りにゲームが進んでい  
ると思つていても、その実、それは相手の想定範囲内のことなの  
ではないか。頭に残る不安は拭えない。

隣に居る一条は言葉を出さずに、じつと戦況を見守っている。周  
りがとやかく言うべき状況ではない、ということが良く分かつてい  
るからだろう。今はその慧眼がただ、ありがたかった。

深呼吸をする。まずは落ち着くこと、それが大事だった。指揮官  
が動揺すれば周りにも伝わる。

そう、俺は今、戦をしているのだ。

「何か変わった遊びがしたい！」

とある日、桜舞う陽野<sup>ひのえへいわのうら</sup>江平和公園に響いた、その無邪気な一声が  
事の始まりだった。

「変わった遊び？」

三年生から六年生までの様々な学年の小学生たちに囲まれた、俺

と遼一、一条に莉子の清明高校治安部の面々が声を揃えて言った。

一ヶ月に一回ほど、この陽野江平和公園でピクニックをするのが治安部メンバーでの恒例行事となっている。来る回数が多いと自然にこの公園で遊んでいる子供たちと仲良くなり、一緒に遊ぶのも恒例となった。

幸いこの公園はとても広く、大人数で遊ぶのに適している。元々は戦後、米軍の出版センターとして接收されていた土地が、全面返還されたのを契機に隣接していた二つの公園を統合したのが、現在の陽野江平和公園の姿だ。

この公園には大きく分けて三つのエリアがあり、それぞれ『ふれあい広場』、『はだしの広場』、『みんなの広場』と呼ばれて親しまれている。一番の敷地を誇るふれあい広場では、ほぼ全面が芝生に覆われ、しかも地形がちょっとした小山のようになっており、走り回るだけでもそれなりの満足感が得られる。ただ、近くに戦争や環境破壊の歴史を学ぶ、平和会館という施設があり、学生や高齢者の方が見学している場合があるので、その付近では静かにするのがマナーだ。

はだしの広場ではじゃぶじゃぶ池と呼ばれる池があり、この公園の見所の一つとなっている。更にその名の通り、はだしになって遊べるようにウッドデッキや人工芝が敷き詰められているのも大きな特徴だ。みんなの広場は主に遊具が置かれたエリアで、様々なアスレチックを楽しむことが出来る。その他にも小さな広場がいくつかと野外音楽堂があり、子供はもちろん、俺たちのようなそれなりに年のいった子ども楽しめる公園と言うわけで、治安部メンバーのお気に入りスポットの一つに数えられる。

「そう！　なんか他の人たちがやったことのないような、すごい遊び！」

目をキラキラと輝かせた男の子、樹くんたつきが言った。心なしか、周りの子ども目を輝かせているように見える。俺たちならきつと何か良い知恵を持っている、そんな期待が籠もった目だ。

その期待にはなんとかして応えてあげたい所だが、多数の小学生でも楽しめ、尚且つ、奇抜な物となるとすぐには浮かばない。

「変わった遊び、か」

声に出してみるが、それで何か思いつく、という物でもない。他、三人も似たような物だった。結局、その日は良いアイディアは浮かばなかったのだが、次に公園に訪れたとき遼一がある遊びを提案した。

「戦争ごっこ、やってみないか？」

その言葉を聞いた時は子供たちだけでなく、俺や一条、莉子も間の抜けた顔をしていたと思う。

「ルールはこうだ」

面白い遊び、という自信があるのだろう。遼一がルールの説明を始める。

まず最初に全体の人数を二等分し、二つの組に分かれ、その際に二つの組それぞれの大將も決める。そして、両組で三人一組の部隊を七つ作り（俺たちを含めた面子が大体、四十二人のため）、一人ずつ水鉄砲を持ち、水に濡れると色が変わる紙で作られたゼツケンを身に付ける。このゼツケンを水鉄砲で撃つことがこのゲームの基本的な戦闘だ。ゼツケンを撃たれた者は戦死扱いとなり、そのゲームでの参加は禁止。また、部隊の隊長が戦死し、尚且つ、その部隊の兵が残っている場合、敗走扱いとなり、一度自軍の本陣に帰るまでは敗走側からの攻撃は禁止され、ひたすら逃げることになる。無論、攻撃側の追い討ちは可能。周りの部隊が敗走側を援護することも可能。敗走し、自陣に戻ることができた場合は、その残った兵のみで部隊を作り、復帰になる。尚、各部隊のリーダーは連絡用の無線機（遼一の私物）も身に付ける。

両軍の前準備が終わり次第、十五分間の作戦タイムと本陣を決めることになる。この十五分の間は全面的に交戦は禁止。行った場合はその者が所属する部隊ごと参加禁止のペナルティを負う。

最終的な勝利条件としては相手の大將を戦死させること。ここま

でが大まかなルールだが、もう一つ重要な概念として兵糧がある。このゲーム内での兵糧は水鉄砲の弾になる水であり、戦闘方法が水鉄砲になる以上、水の補給は必須条件となる。そこで両軍は指定の給水ポイントでのみ弾の補充が許される訳だ。両軍ともに給水ポイントはじゃぶじゃぶ池。広範囲に渡る池なので、あらかじめ指定された別々の場所で両軍は給水が許される。そして当然、兵糧と銘打っている以上、じゃぶじゃぶ池は兵糧庫の役割を持つことになる。これが何を意味するかというと、兵糧の奪取がが可能ということだ。それぞれの給水ポイント付近に子供二人が座れる程度の置石があるので、そこに（都合のいいことに辛うじてフラッグを立てられる穴がある）小さなフラッグを立てることで占領したことになる。占領された兵糧庫では給水不可。奪われた側は取り返すまでは給水できないという訳だ。

「月原、翔太くんたちの部隊が壊滅したらしい」

無線機からの報告を聴いたのだから、表情を変えずに一条が言った。また、一つの駒……いや、歴戦の勇士が手元から消えた。俺は唇を噛んだ。

「莉子の部隊か？」

「ああ、流石だな。もう二部隊も莉子に全滅させられている。一騎当千の兵とはあれのことを言うのだから」

目を閉じる。脳裏に返り血を浴び、怪鳥のようなおぞましい笑い声を上げている莉子の姿が浮かんでくるようだった。

やばい、超怖い。ちびりそうだ。

「莉子の部隊の構成はどうなってるんだ」

目を開き、一条に尋ねる。

「莉子の他には一志くんと優奈ちゃん。二人とも高学年かつ、このゲームでいつも活躍してる子たちだ」

「精鋭中の精鋭って訳か」

今回の戦は今までやって来た物とは少し勝手が違う。何故かと言うと両軍の大將が俺と遼一であるからだ。今まではあくまで子供たちを楽しませるための遊び、という趣向だったので、俺たちはあくまで一兵卒の立場を貫いてきた……が、今回は記念すべき十回目の催しということもあったからだろうか、子供たちの要望により本来ならばあり得ないカードでの戦いが組まれたというわけだ。

理由はどうあれ、やるからには全力。それが男の戦いというものだ。

「今まで邪魔にならないよう、口を閉ざしてきたが、そろそろ被害も目立ってきた。だから、あえて言わせてもらう」

一条が戦場に向けていた目を俺に向ける。その眼光は正しく將軍のそれだった。

「回りくどいな、なんだ？」

「勝算はあるのか？」

「ある」

俺は一条を真っ直ぐに見つめ、即答した。

「そうか、ならばもう野暮な事を訊くのはよそう。私は月原を信じている」

「えらく信頼されちゃってるんだな、俺」

少し意外だったので、そんな言葉を出してみる。

「月原は頭が良い人を装った馬鹿でナルシストの変態だが、やると言ったことはやるからな。その辺は疑っていない」

「そりゃどうも」

さり気なく、というよりかなりストレートに罵倒された気もしたが、今は気にしないことにする。信頼はされてるみたいだからな。

「戦況をもう一度確認したい。頼めるか、一条？」

「勿論だ」

大きく頷いて答えると、一条が落ち着いた声音で状況の説明を始める。

不思議なものだ。この声を聴くと、とても落ち着く。

「現在の部隊数は敵軍がほぼ無傷の七。ただし、一部隊の兵が一人戦死している。対してこちらは五部隊。失った二部隊はともに全滅している。」

両軍の動向だが、こちらは現在、兵糧庫付近に一部隊が潜伏中。三部隊……先程二部隊になったが、みんなの広場からこちらの本陣である、ふれあい広場へと繋がる道に防衛ラインを形成している。月原の言うとおり本格的な交戦は徹底的に避け、複数部隊で上手く連携して、攻めると見せ掛けては退くを繰り返してる。お陰で今のところ残った二部隊に被害は無く、敵軍の莉子と相当苛立っている様だが、部隊数が減ったのもあって徐々に押し込まれてきている。もう長くは持たないだろう」

足の速い者で構成した部隊が功を奏したのだろう、今のところは上手く敵を焦らしている様だが、それも時間の問題だ。相手が本格的な攻勢に出れば、数で遅れを取るこちらは崩壊する。

しかし、付け入る隙が無いわけではない。遼一は俺よりも遥かに切れ者だが、過剰なまでの完全主義者。勉強、遊び、その他諸々に完全な成果、完全な勝利を求める。今回の場合も恐らくは兵糧庫を奪い、こちらの部隊を全滅させるところまでが遼一の戦だろう。

だとすれば、そこに勝機がある。こちらは勝つことさえ出来ればいい。完全な勝利など必要ではないのだ。遼一が俺の行動よりも速くに自分の主義を捨てられるか否か。勝負はそこに掛かっている。

「敵の動向はどうだ？」

「兵糧庫に二部隊。さっき言った、今こちらを攻めている部隊が二和泉はおそらく本陣に居るだろう。後二つの動向は不明だ」

目を閉じる。やはり機は今しかないのかもしれない。敵前線の部隊はそこそこにこちら側に引き込めている。ここで莉子と樹くんの部隊を潰せれば、戦局は変わる。敵の不鮮明な部隊が気に掛かるが使い道としては遊軍、伏兵、別働隊のどれか。はだしの広場経由での別働隊が考えられるが、兵糧庫付近に伏せている部隊からの連絡

がないため、それはないと見て良いだろう。

腹は決まった。遼一が本格的に攻めに入る前にこちらが攻めるべきだ。

「玲花、そろそろ攻めようと思う。前線の二部隊を撤退させてくれ。あとは伏せている部隊に指示を一つ」

「了解だ」

この動きで戦は決まる。俺はそう確信していた。

戦況は優位ではあるが、あまり芳しくない。みんなの広場からふれあい広場へと続く道の戦線が、思ったより手を焼いているのが大きい。莉子と樹くんには任せればそれほど時間は掛からないと思っていたが、その予想は大きく外れていた。

「莉子、まだ破れそうにないか？」

「厳しいね。蜂みたいにこっちの周りをぶんぶん飛ぶ癖に、本腰で戦おうとしてないよ、ここを突破するなら数が足りないかも」

無線機からの応答に唇を噛む。これは勝負だ。それも宗一との。それならば、完膚なきまでにあいつを叩き潰したい、という気持ちが強かった。

完全主義者。人からはよくそう言われるし、自覚もある。もう少し肩の力を抜け。これもよく言われる。だが、俺からすれば何故、自らが取り組んでいることに対して手を抜かなければならないのか、と思う。何事にも全力を。何事にも自らが納得するまで向かい合う。俺の信条だ。誰になんと言われようが変えるつもりは無い。

特に今回はあいつとの勝負。俺が認めた数少ない男であり、親友だからこそ、完全に完璧に一分の隙も無く、叩き潰したい。

不意に無線機を通じて莉子から連絡が入る。

「和泉、弾切れかな？ 前線の二部隊が撤退していくよ。今から追撃するね」

撤退？ 弾切れ？ この状況で？ 確かに敵はこちらを牽制するために頻繁に接近と後退を三部隊で繰り返していた。その際には当然、弾は消費する。故に水が切れたのか？ 否、それならば相手より少ない数で応戦していたこちらよりは相手の方が弾には余裕があるはず。ならば、一部隊を失ったため、戦線を維持できないと判断しての撤退か？ 否、援軍を望めないこの戦いで戦線を放棄することは即ち負けだ。だとすれば何か？ 考える。この行動には必ず意味がある。

まさか……頭を一つの可能性が過ぎる。

「莉子、それは畏だ。すぐに退……」

「え、玲花？ うわ、月原も」

遅かった。その声が聴こえて来た時にはこちらの部隊が壊滅したようだ。すぐに別の報告が無線機から入ってくる。こちらの兵糧庫が奇襲を受けたとの事だった。敵は一部隊。こういう時のために兵糧庫にはそれなりの数の守備隊を配置している……が奇襲を受けたとなればしばらくはその場に釘付けにされるだろう。

遊軍にしていた一部隊に本陣へ向かうように伝える。

「くそっ」

恐らくは先ほどの撤退はフェイクだったのだろう。敵に誘い込まれた所で偽撤退を仕掛けた部隊が反転。その際に宗一と一条の部隊までもが、莉子たちに襲い掛かった。計四部隊。しかも宗一と一条が居るとなると、さすがの莉子でも為す術はなかったは容易に想像できる。

そしてその四部隊は間違いなく、自分を討ち取りにここへと向かってくる。こちらの本陣には三部隊。せめて同数の部隊が居ないと抑えきることは難しい。

完全な詰みだった。

「ごめん……和泉」

「気にするな、莉子。今回は完全に俺が悪い」

時刻はちょうど十二時過ぎ。春の匂いを色濃く漂わせる陽野江平和公園にて、俺たちはお昼ご飯にありつこうとしていたところだった。

先の戦争ごっこで負けた遼一と莉子は今回適用された特別ルール、負けた方は子供たち全員にお菓子を奢る、を実行してきたところである。端から見る子供たちの笑顔をは眩しかったが、対照的なのはこの二人だ。学生には中々に痛い出費だったというのもあるだろうが、お互いに今回の負けに関して責任を感じているようだった。

特に莉子は遼一に対して好意を抱いている。それ故に良い所を見せようと張り切ってしまったのが、終盤のフェイクに釣られた要因でもあるのだろう。それを自覚して落ち込んでいるようだった。遼一は遼一で自分の采配を責めている様だ。負けた要因は大将であった自分一人の物。遼一らしい考え方だ。

しかし、このままではせっかく、この爽やかと言う言葉を体現したかのような芝生が広がるふれあい広場で昼食を食べようというのに、この空気では美味しい物も美味しいと感じられない。そこで俺は莉子にアイコンタクトを取ることにした。

『莉子、このままじゃ空気が悪すぎる。お前の自慢の料理で流れを変えるんだ』

莉子は見かけによらず料理が得意だ。元はと言えば女の子は料理が出来るほうが良い、と言った遼一の言葉を真に受けてのことだが、とにかく美味しいものを作る。それ故にピクニックの時は毎回莉子がお弁当の用意を担当している。それに今日は遼一へのアピールのため、初のお菓子作りにも挑戦したと言っていた。二人の暗い雰囲気を取り払うには申し分ない。

『分かったよ』

俺は神妙な面持ちの莉子に向かって小さく頷く。

莉子がてきばきとシートの上に色とりどりのお弁当を並べ始める。

から揚げ、たまご焼き、プチトマトやレタスなどの野菜、他多数。お弁当のお手軽かつ定番のメニューが目に入るが、別の箱に一つ見慣れないものがあった。

「これは？」

なにやら黒いソースのようなものが掛かった鶏肉を指差して言った。仄かに甘い香りがする。

「それはコーラで蒸した鶏肉だよ」

「コーラで？」

遼一が怪訝な顔をする。俺も同じような顔をしていたと思う。コーラと言えば、どこにでも売っている、あの無駄に甘くて黒い炭酸飲料だ。あれで鶏肉を蒸したというのか？ 莉子はいつからゲテモノを作るようになったんだ。

「大丈夫、味見はしたから。コーラのほかにも醤油とかで味は調整してるし、玲花だつて味見したんだよ？」

一条が莉子の言葉に頷く。

「自分が知らない物だからと言って敬遠するのは良くないぞ？ 男なら黙って食え」

実に厳しいお言葉である。しかし、この二人が大丈夫というなら大丈夫だろう。一条はともかく、莉子は真顔で嘘を付くタイプではない。

「いただきます」

遼一が箸を伸ばす。さすがだ、動かした箸に迷いなど無い。見た目は美味しそうなコーラ肉を一切れ取ると、そのまま口に入れ、じつくりと租借する。

莉子は悲しいほどに真剣な眼差しで遼一の反応を見守っている。自信があるとは言っても、そこは莉子も女の子である。好きな人に自分の料理を食べてもらうのは、いつになっても緊張するようだった。

「美味しい」

ぼつりと一言、遼一が漏らす。それは正に思わず零れた、という

様子だった。美味しい。良い料理にはこれ以外の言葉など余分不要なだけだ。その嘘偽りのない一言さえあれば、作り手に気持ちは伝わる。

莉子は心底、ほっとした様子で、けれども向日葵をも恥じらう様な満面の笑みを浮かべていた。見ているこっちまで笑みが零れる。

「それじゃあ、俺も」

コーラ肉に手を伸ばすが、一条と莉子からストップが掛かった。

「なんすか？」

「月原にはこちらを用意した。まずはこっちから食べてみてくれ」

ニヤリと笑う一条。それは正しく悪魔の微笑。俺の脳に封印された一つのトラウマが去来する。

「いつぞやのリベンジだ、月原。まずは特に反応が酷かったお前に食べて貰いたい」

一条が取り出した箱からは先ほどの莉子シェフ作のコーラ肉と同じものがあつた。先ほどのよりはソースの色がいくらかどす黒いのが気に掛かるが、何にしても美味しそうではある、見た目は。

「マジ、ですか？」

恐る恐るといった感じで尋ねる。一つ言っておくと以前に俺と遼一は一条が作ってきた料理によって地獄を見ている。別に比喻ではない。三途の川を渡るどころか、ダイブしてしまうほどにそれは威力があつた。以前も見た目は莉子に負けず劣らず良かった。でも、味のほうは米軍が開発した生物兵器と言っても過言ではない。漫画のように口にした瞬間にぶっ倒れるなどと言うものではなく、口に入れて咀嚼している時は普通に美味しいのだが、飲み込み、腹に入つた瞬間、どうしようもない不快感に襲われ、まるで入れてはいけないうものを入ってしまったかのように腹が燃える。燃えるのである。もう一度言おう、腹が燃えるのである。尚、これは比喻ではない。

「マジだ」

大きく頷く一条。何故だろう、どういふ訳か俺の右手が小刻みに震えている。瞬きの回数が自分でも分かるほど多くなった。遼一の

方をちらりと見る。いわゆる緊急信号というやつだ。

遼一は俺の視線に気づくと何も言わず、俺の肩に優しく手を乗せると首を横に振った。その様は正に手術の失敗を無念そうに告げる医者のような様子だ。

ああ、終わったんだな、俺。

莉子の方に視線を向ければ、これは簡単な料理でそうそう失敗しないはずだから、玲花を信じろ的な視線を返してくる。なんて無責任な。

「月原はそんなに私の料理を食べるのが……嫌か？ 確かに以前は私が未熟ゆえに酷い結果になってしまったが、今回は自信もある。大丈夫なんだ。だから、月原に……食べて、欲しい」

少し俯き、もじもじとした様子で一条が小さく言った。こんな一条の姿は初めて見た。普段から下ネタも平気で口にする一条がこんなにしおらしくしている。もう逃げ道は無くなった様なものだった。俺は腹を括り、コーラ肉に手を伸ばす。

その時だった。俯いていた一条が、口元を、歪めた。まるで山奥に存在する怪しいレストランにこのこやってきた人間を、高みから見下ろす化け猫のように。

「おい、こいつ今、笑ったぞ！」

「この期に及んで、何逃げようとしてんの、男でしょ、月原」

ため息を吐きながら莉子が言う。一条は一条で笑ってなどいない、と真顔で言っている始末だ。

「分かったよ、食べる、食べるよ」

一切れ取って口に入れ、ゆっくり咀嚼する。ソースの仄かな甘味と鶏肉の重厚な味が口に広がる。相変わらず嚙んでいる時は美味しい……が戦いはここからだ。

ふと、視線を感じたので目を向けると、一条が固唾を呑んで見守っていた。瞳に宿した色は真剣そのもの。案外、俺が思っている以上にこの料理に対して本気なのかもしれない。

呑み込む。ついにやってしまったと言う後悔と、これから腹の中

にやってくる友人との再会を覚悟する。しばらく肉は喰えないだろうな、そんなことを考える。

「あれ？」

それなりの時間が経過したが、いつまで経ってもあの不快感と腹が燃えるような兆候は現れない。前回ならとつくに顔を歪めているところだ。

まさか、成功したと言うのか？ そんな、あり得ない……いや、あつてはならない考えが頭を過ぎる。しかし、あの一条の料理だ。そう簡単に信じることも出来ない。

「もう一つ、貰っても良いか？」

「どうぞ」

やけに畏まった様子の一条の許可を得て、もう一切れ口に入れる。広がる美味しさ、それを呑みこむ。

「なん……だと」

恐ろしい現実が俺の前に突き出される。これは……まさか。

「美味しい」

ただ、その一言を零す。

「本当か？」

不安と期待が入り混じった瞳で、一条が俺に問いかける。遼一はそんな馬鹿な、といった顔をしている。俺は一条にはっきりと頷くと「美味しいよ」と微笑みかける。

「良かった」

一条が心底ほっとした様子ではにかむ。普段はあまり見せないその顔にちよつと心が揺れる。

「俺も食べて良いか？」

「どうぞ」

信じられないを顔に貼り付けたままの遼一が、魔王の城に挑む勇者のような気迫で言った。こいつも前回地獄を見た同志である。信じられない気持ちは良く分かった。それに人は他人の評価だけでは物事を完全に信じる事が出来ない生き物だ。故に自分で信じるに

足るか確かめようとする。

「確かに美味しい」

自分の世界を壊されたかのような表情と声音で遼一が言った。どうやら勇者は無事に生還したようだ。

「それでは玲花の料理も高評価だったところで、私のお菓子もお披露目しようかな」

まだメインも食べ終わってないのに早すぎじゃないか、と思ったが。遼一に早く見てもらいたいのだろう。遼一は極度の甘党だしな。「莉子はお菓子も作れたのか、楽しみだな」

遼一が顔を綻ばせて言った。なんとというか甘いもので微笑むというのはこいつにとってもなく似合わないが、口には出さない。

ちらりと空を見上げる。青い空を遮る物は何もない。今日も明日も明後日も、俺たちの世界はゆっくりと時の歩を進めていくのだらう。

### 第三話「お日様とお月様」

静寂。辺りを包むのはただ、それだけ。陽野江教会の地下に設けられた大規模な空間の一角に私は居た。白を基調としたこの小さな一室には私だけが入れれる。周りには申し訳程度に置かれたドレッサーと本棚。それ以外には何も無い。

鏡には私が映っている。ここに居るのは、これに映っているのは、紛れもなく私だ。私以外の何者でもない。ぴたりと鏡に触れる。自分の存在を確かめるように、私はここに在るのだと、世界に訴えるように。

目の前には小さな小瓶。中には薬が入っている。なんてことは無い、市販で売られているただの薬だ。でも、私はこれでほんの少しの休息を得ることが出来る。薬を使っていない時に私の世界を支配するのは、怒りと虚しさ。私にはそれ以外に何も無いのだ。いや、それ以外の感情を知る暇がなかった、と言うべきか。

「陽原様、そろそろお時間です」

「今、行くわ」

ノックされた、ドア越しに答える。私を呼んだ者はいつものように扉の前で待っているのだろう。この部屋には私以外の者が入ることはない。

薬の中身を何粒か手のひらに出す。量は適当、出ただけを飲む。

人は独りでは生きていけないと同時に孤独だ。どれだけ愛した恋人が居ても、どれだけ心を交わせた友人が居ても、血の繋がった家族が居ようとも、人である限りは、一人である限りは、他人である限りは、孤独だ。人と人の世界が一時は交わることがあっても、永遠に交わり続けることはないのだから。

だから私は薬を飲む。一時の安らぎのために、目的のために、世界から逃げるために。

目を開くと大勢の人の前に私は居た。彼女に望まれたから、私はここに居る。今回のようにいきなり呼び出されることは珍しくないが、最近その頻度が目に見えて増えている。彼女が言うには私に人の心を掴む才能があるからだそうだ。故に演説を行うときはこうして呼び出される。

落ち着いた雰囲気のプロセニウム型ホールにはざっと見ただけで数百人の人が居るのに、音ひとつしない。あるのは不気味なまでの静。ただ、一度触れてあげれば、激しい動へと変わる熱を秘めている。

天使の囁き。私を教祖と、天使と崇め、愚直なまでに信じる。ここに居るのはそんな者たち。信じるものが在るとするのは、それだけで一つの救いと言って良い。ある程度の判断をそれに委ねることが出来るからだ。故に救いと言うのを手に入れるのは大して難しいことじゃない。考えることを放棄すればいいのだ。ここに集まった者はそういう救いを求めた人たち。

だから私は、彼らの天使として囁くのだ。彼らを導くために。導く場所は天国であり、地獄でもある。

これは彼女に対しての償い、あるいは私の自己満足。形容する言葉はなんでも良い。私はそれをしなければならぬ程のことをしてしまっただから。

「皆さん」

私は凜とした声で彼らに、彼女らに囁く。彼女のために、私のために。

開かれた扉から流れる、新鮮な空気が俺を出迎える。

青い空に白い雲。お日様も申し分ない輝きを放っている。今日も今日とて良い天気である。こつも晴れの日が続くと、偶には雨でも降らないかな、と思ったりもするが、外に出るとそんな思いは吹き飛んでしまった。人とは単純な生き物だな、と思う。

「いつてらっしやい」

眠そうな母の見送りを背中中で聞きながら、学校へ続く道を歩き始める。日課である五キロのランニングをこなし、シャワーを浴びた後の登校は実に清々しく、足取りも軽快になるというものだ。

時刻はちょうど七時半。十分もあれば学校へ到着するので、八時四十分からホームルームが始まることを考えると、俺の登校は比較的早い部類に入る。元々、早起きが苦ではない体質だったのだが、中学に入ってランニングを始める様になると、むしろ遅く起きる事ができなくなった。それが今のような実に健全な朝へと繋がった訳だ。

学校に無事到着。相変わらず不気味なまでに綺麗な教室にはまだ誰も居ないようだった。

「一番槍はこの月原宗一だっ」

意味も無く名乗りを上げてみる。当然ながら反応を起こす者は居ない。そんなことに一抹の空しさを感じつつ、自分の机にカバンを置き、人気の無い廊下と階段を進みながら屋上へと向かう。

この学校の屋上は珍しいことに立ち入り禁止ではなく、一般生徒にも解放されている。まあ、好き好んで使うのは少人数の物好きだけだが。

扉を開けると、待ってましたといわんばかりに風が俺の体を吹き抜けていく。ここの屋上で読書と洒落込むのが俺の中での定番となっている。イケメンの俺に相応しい優雅な時間だ。

「珍しいな」

屋上には先客が居た。黒く長い髪を風に預け、屋上から街を遠望

していたのは

「なんだ、月原か。おはよう」

一条玲花その人だった。この時間に一条が屋上に居るのは珍しい。「おはよう。珍しいな、一条が早起きだなんて」

「私はいつも早起きだぞ？　ただ朝早くに学校へ行こうとしていないだけだ」

これは心外、とばかりに一条が返してくる。それはどうでも良いとして、手すりに預けた腕に押し掛かる胸が、圧倒的な存在感を放っていた。ちよつとジャンプすれば、ゆっさゆさ揺れるのは間違いないボリウムだ。ゆさゆさではない。ゆっさゆさである。

「相変わらず良いおっぱいだ」

「私以外の者だったら、今ここで空から地上への旅を強要されてもおかしくないセリフだな、ケダモノ」

呆れた様子で一条がこちらを見る。一条はこういうことにも臆さず返してくれるからありがたい。

沈黙。二人で黙って屋上から見える景色を眺める。ビルやマンシヨンに一軒家。なんともつまらない風景がそこには在る。

月野町。この町はそう呼ばれている。陽野江区の中の月野町。そんなことからここを太陽と月が交わる町、なんてロマンチックな呼ばれ方をされたりもするが、なんてことはない有り触れた町。それなりに発展していて、それなりに過ごし易い。

「陽原と月原……じゃあ私がお日様で宗一がお月様だね！」

脳裏に浮かんだのは無邪気なあの子の言葉。変わってしまったあの子の言葉。

「ねえ、知ってる？　太陽と月の結婚は大いなる技の完成を意味するんだって。私と宗一がもしも……もしもだよ？　その……け、結婚とかしちゃうたら、何か凄いことが起きるのかな」

どこかで手に入れた怪しい知識を、あの子はガラスの靴とかぼちやの馬車に憧れる女の子のようにうっとりとした様子で披露する。遠いようで遠くない、全ては過ぎ去った後の、今では決して手が届かないころのお話。

「産卵を間近に控えたウミガメみたいな顔をしているぞ、どうかしたか？」

「悪いことは言わない、ウミガメさんに全力で謝って来い、な？」  
「なんとというか色々とし礼な例えだ。俺にも、ウミガメさんにも。」

「会話が途絶え、冷え切った場を持ち直すために言ったのだが、失敗だったか？」

「残念ながら失敗です」

私としたことが…… というような表情で一条が言った。相変わらずどこかずれた子である。

しかし、俺はこのずれた子が嫌いじゃない。むしろ好きだ。その傾向は最近特に強くなってきている気がする。恋愛感情というにはあまりに臆げで、かと言ってそうではない、と完全に言い切ることもできない、曖昧な想い。

「ところで、月原は世界の終わりについてどう思う？」

景色を眺めながら、一条がぼつりとその言葉を漏らす。言葉は水面に沈んだ石のように小さな波紋を心に残す。

世界の終わりについてどう思う？」

「私はな、実は楽しみにしているんだ」

「へえ」

一条が漏らした想いは恐怖でも、憤りでも、悲しみでも、諦めでもない、好奇心の心。だからだろうが、俺は興味を惹かれた。

「楽しみって、具体的にどんな？」

「言っておいてなんだが、大したものじゃない。ただ、今まで当たり前に在ったものが失くなる。そのことで何か新しい景色が広がる

んじゃないか、何か珍しいものが見れるんじゃないか、そう思ったんだ」

黒く長い髪をたなびかせ、つらつらと一条が想いを語る。それはなんてことのない一人の想い。

「良いんじゃないか、そういう考え方も。一条らしい不思議な考えだ」

「まるで私が普段から不思議発言をしているみたいじゃないか」

「してるだろ」

「なん……だと」

一条に衝撃が走る。自覚なかったのか、この方は。普通、初対面の人に「君の瞳に映る空はどんな色をいている？」、なんて電波飛ばしまくりなことは訊かない。相手が美少女じゃなかったら回れ右して逃げている。でも、そんな子だからだろうか。俺も「生きる意味を探している」、という赤面モノの告白をしてしまった。

「私が言ったんだ、次は月原の番だぞ」

ちよつと拗ね気味に一条が促す。

「世界の終わりについてだっけ？ ……そうだな怖い、ていうのとむかつく感じかな」

「むかつく？」

「そ、俺の始まったばかりの明るい人生を許可なく終わらせんじゃねえよこの野郎、てね」

「月原らしいな」

「そうか？」

「ああ、とても」

風が吹いた。今、話した言葉は空に消えた。では今まで口にした言葉はどこに消えたのだろう。なんとなくそんなことを思った。

一条を見る。その傷一つない、綺麗な横顔を。

「どうした、私の顔に何か付いているか？」

俺の視線に気づいた一条が顔をぺたぺたと触りながら言う。今日の俺はどこかおかしい。だから、こんなことを口に出してしまった

のだろう。

「一条、俺と付き合わないか？ もちろん、付き添いつて意味じゃなくて恋愛的な意味で」

一条は心底驚いたように目を丸くするした後、それを隠すように笑って言った。

「冗談だろう？」

「本気だ」

真つ直ぐに目を見つめる。どちらも目は逸らさない。

人は恋をすると馬鹿になる、と良く言うが、あれはあながち間違いない。人が恋に落ちると脳が多幸福感をもたらすホルモンを分泌させる。そのホルモンは神経を敏感にさせ、疲れや眠気を吹き飛ばし、向上心を上昇させ、大きな快楽を与えるなど様々なプラス面の効果を引き起こす。

しかも、そのホルモンの主成分は覚せい剤として認定されているのだ。恋をすると言うのは、言ってみればシャブ漬けになるようなもの。脳が見せてくれる一時の夢であり、一時の現実。今の俺はそんな夢と現実の世界に足を踏み入れる寸前なのかもしれない。

しばらく見つめ合った後、一条が口を開く。

「そうだな、付き合ってみようか」

「随分早い回答だな、良いのか？」

「ああ。実を言うとな、私は生まれてこの方、恋愛というものをしてたことがない。だから、この機会にそれを経験しておくのも悪くないと思った。それに私は月原のことは嫌いじゃない」

「そうか」

告白をした、それを受け入れてもらった。ただ、それだけ。何も特別なことではない。以前から好き合っていた者だろうが、片思いの者だろうが、今のようになんとなく告白し、なんとなく受け入れた者だろうが、全ては同じこと。

「それじゃあ、よろしく、玲花」

初めて名前と呼んだ。だからどうしたと言う訳でもないが、玲花

は少し気恥ずかしげに頬をかいて応える。

「よろしく、宗一」

この日から俺と玲花の奇妙な関係が始まった。

「じゃあ、今週の三連休は月原の家でお泊まり会しようよ」

「何故、そうなる」

授業が終わった放課後、治安部の部室で暇を持て余し、駄弁っていたらそんな流れになった。今週は学校の創立記念日が重なる関係で、目出度く三連休、ということと、都合が良いことに俺の母親が週末から友人と旅行に行くため、俺の家に白羽の矢が立った訳だ。

「俺は別に構わない」

「同じく」

遼一と玲花が乗ってくる。三対一、圧倒的戦力差である。何時の世も数の力に独力で打ち勝つのは難しい。

「じゃあ、決定と言うことで」

「別に良いけど、お泊まり会だけじゃ暇になるのは目に見えてないか？」

俺が気だるげにそう言うと、莉子がちゅちゅと人差し指を左右に振る古臭いジエスチャーをかます。軽くイラッとした。

「そこでこれですよ、皆さん」

莉子がドヤ顔で四枚のチケットを机に置いた。

「遊園地ぐりんぺ、無料招待チケット？」

どうやら莉子を取り出したのは遊園地の無料招待券らしかった。

しかし、聞いたことのない遊園地だ。名前から滲み出るマイナー臭と胡散臭さが半端じゃない。

「胡散臭い名前の遊園地だな、とか言いたいことは色々あるけど、こんなものどこで手に入れたんだ？」

玲花がチケットで紙飛行機を折りながら、とりあえず訊いておう、といった感じで言った。しかし、チケットみたいな細長い紙で折り紙とは器用な奴だ。

「お母さんの知り合いがそこに勤めてるんだけど、今度閉園しちゃうらしくてね、それで良かったら遊びに来ないかって」

「閉園するのによ」

胡散臭い名前だが閉園するというのは少し悲しい気もする。

「結構遠いな」

遼一がチケットをしかめっ面で睨む。そういえば電車が苦手だったな、こいつ。

「なんか反応悪いけど、全員参加で良い？」

「お前が提案した時点で他の選択肢ないだろ、それで良いよ」

俺の言に残り二人も同調の意を示した。

そんなこんなで今週末はお泊まり会と遊園地へ行くことが決定したのだった。

帰り道。月原、玲花と別れた私は和泉と一緒に下校していた。紅く染まり始めた空の下を、なんてことはない話をしながら歩いていく。

「あ」

「どうした？」

急に立ち止まった私を和泉が不思議そうに見る。その顔を見ると嬉しくなる。私の存在をちゃんと観ていてくれる気がするから。

「ううん、なんでもない」

「おかしなやつだな」

再び人気のない道を歩く。もう少しで分かれ道。和泉とはそこでお別れだ。

「じゃあな、また明日」

「また明日」

にこりと笑って手を振る。和泉が去っていく。私はそれを見つめていた。最近、和泉のことを想う時間が増えてきている。以前からも想ってはいたが最近は特にだ。

理由は自分でも分かつてる。世界の終わり。そんな理不尽が近づいているから、焦っている。時間がないのだ。このまま月原や玲花、そして和泉と過ごして終わりを迎える、というのも悪くはない気がするけど……けど。

「影」

地面に目を落とすと私の足から影が伸びていた。なんとなく足を伸ばし、影を踏もうとする。でも、影は私の足を避けるようにして逃げていく。それを何度か繰り返す。追っては逃げられ、追っては逃げられ。

その様子はなんとなく和泉に対してアピールをしている私の姿と重なる。それでも中学の時から頑張ってアピールしているのだが、中々気づいては貰えない。それとも気づいてはいるが、その気はないからスルーされているのか。

「どうなんだろ」

一方的な片思い。アピールはするが告白する勇氣はない。なんて自分勝手な女なのだろうか。そんなだから何時まで経っても状況が変わらないのだ、ということとは百も承知だ。

「どうすれば良いんだろう」

家に着いた。郵便物がないかポストを調べる。

「お、私宛だ」

何枚かのチラシやら封筒に隠れて、一つだけ私宛の封筒があった。白い無地の封筒に『広原莉子様』、と書かれている。

「嘘、でしょ……これって」

封筒の中にあっただのは、私の運命を大きく変えかねない代物だった。

「ただいま」

「おかえりなさい」

妹の春香が玄関までやって来て俺を出迎える。普段ならこんなことは絶対にやらない妹だ、何か裏があるのは目に見えていた。

「お荷物をお持ちしますよ、遼一兄様」

「気持ち悪いな、何か頼みごとか？」

俺の返事を聴くと、春香はぎくりとした様子でうるたえた。

「流石は兄上、分かってしまいますか」

「口調まで変えて、自分からばらしてる様な物だろ、それじゃ。言ってみる」

口をモゴモゴと動かし、如何にも言い難そうな感じで春香が喋り始める。

「実はですね、数学の宿題でちょっとばかり強敵が居まして、奴の倒し方を教えて頂きたいのです」

「もう中三なんだから、宿題くらいできるようになれよ……分かった、後で見やる」

俺がそう口にするると春香が満面の花を咲かせる。中三にしては妙に子供っぽい所が未だに多くある妹だ。だから、こうして甘やかしてしまふのかもしれない。

「そういえば、珍しく兄さん宛に封筒が届いてたよ」

「封筒？」

「然り、部屋に置いておきました故、急ぎ確認されたし」

そう言っって春香は上機嫌でリビングに向かっていった。なんで古風な口調になっていたのかは謎だ。

部屋に入ると確かに白無地の封筒があった。なんだろうと思いなから開けてみる。

「おいおい、マジかよ」

思わず、手が震えた。喜んで良いのか悪いのか。白の封筒に入っていたのは一つの奇跡。

方舟<sup>シェルター</sup>への招待状。封筒の中に入っていたのはそれだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4837w/>

---

瞳の中に映る空-End of the world and color of the sky-

2011年11月8日08時10分発行